NTS物語

❸ ビジネスモデルの確立へ向けて（第15回）

編集企画体制への道（1）

～セミナー事業⑤握手（上）～

代表取締役　吉田　隆

●プレッシャー

独立創業を果たして半年ほど経った昭和59年6月のある日、フジテクの小野社長から1本の電話をもらった。その夜、本郷三丁目の某料理屋まで来いとのことで出向いてみると、小野社長のほかに新会社の株主である印刷会社の社長も同席していた。酒が進むうちに、「吉田君、今度すごいことやると聞いたが、本当なのか?」と、小野社長がやんわり切り出した。顔は笑っているが、目は笑っていない。実は4ヵ月後に、夢の食品機械と言われていた二軸エクストルーダーに関する国際シンポジウムを計画していたのだった。海外から5名の講師を招待するという本格的なイベントで、およそ500万円の原価が見込まれていた。何しろ資本金100万円でスタートした直後のことである。株主としては、ちょっと待てと言いたくなるのも無理はない。「失敗したら二度とこの業界でメシを食えなくなるぞ!」と、二人でプレッシャーをかけてきた。しかし結局、この企画は必ず成功するという信念がプレッシャーに勝り、予定通り実行した。

「食品産業のための二軸エクストルーダー国際シンポジウム」は、昭和59年10月、三田の建築会館ホールで開催され、予想を大きく上回る食品関係者200余名を集めるスーパーセミナーとなった。結果的に収益の方も、数百万円の利益を上げることができ、前にも述べたが、独立後間もない会社にとって大きな力となった。

他のスーパーセミナーとは異なり、この企画には共同主催者が居た。（株）システムニューライフの菊池三郎社長の協力がなければ、私一人だけではこれほどの成功には至らなかっただろう。今回は、大がかりなセミナーにおけるキーマンとなるパートナーの重要性について語ることにする。

●握手

「二軸エクストルーダー」の名は、都内の書店での食品関係の専門誌の立ち読みで知った。食品産業に変革をもたらすといわれる新技術で、農林水産省食品総合研究所（略称、食総研）（当時）で研究が進んでいた。これは面白い!と思い、すぐに電話ボックスに駆け込み、食総研の番号を調べて電話すると、運良く担当のN氏と話ができた。その2～3日後に東京駅でN氏に会うと、「すでにK社が国内技術に関する充実したセミナーを実施しているので、二番煎じになる。二軸先進国の欧米の研究者の発表がなければ成功しない」とのことだった。同業者に先を越された悔しさと、必ず成功するという確信から、その場でN氏に国際シンポ開催のための協力を要請したのである。その直後、半年ほど前の健康産業関連のセミナーでお世話になった菊池三郎社長を訪ね、二軸シンポの話を切り出すと、目の色が変わった。実は、菊池社長は元不二製油の蛋白部長で、一年ほど前に会社を興したばかりだった。しかも、わが国でいち早く二軸エクストルーダーの可能性に目を向け、国産技術の育成に精力を傾けた当の人物であり、二軸応用商品の開発・販売も新会社の事業の一つだったのである。間もなく、NTSが事業リスクを全面的に負う一方、菊池社長が食品業界への呼びかけを通して集客面で協力するという共同開催の話がまとまったのである。「蛋白野郎」を自称する菊池社長の食品業界での顔は想像以上に広く、わが国の名だたる食品関連企業の幹部や日本の食品研究の総本山である食総研の歴代所長と面識を得ることができた。予想を大きく上回るシンポの実行予算を前に尻込みする私を叱咤激励して、参加者交流の場としてのレセプションの必要性を説いたのも菊池社長だった。シンポジウム1日目終了後、○○○○元食総研蛋白研究室長の乾杯の音頭に始まるレセプションパーティーで、内外の関係者が談笑する中、菊池社長と私は大成功を祝して固い握手を交わしたのである。

●忘れられた原点

シンポジウムという言葉は会議の後の乾杯を意味するギリシャ語が起源だと教えてくれたのは、『フォトンケミカルテクノロジーシンポジウム』（平成2年、幕張メッセ）のレセプションで乾杯の音頭をお願いした東京工業大学の田中郁三元学長である。セミナーの意義が、内容もさることながら講演者や受講者どうしの交流にあるのを知ったことも、二軸シンポの成果だった。会場はそれまでの知識交換の場という静かな雰囲気から一転して、名刺交換や談笑や握手といった活発な人間交流の場へと変貌した。本が多くの人が知識を共有するメディアであるのに対し、セミナーはそこに集まった人たちが知識と面識を共有するメディアであると言える。現実には、セミナー事業の経済性を重視するあまり、知識習得の場という側面ばかりに目が向き、参加者間の交流の場というもう一つの原点が忘れ去られていはしないか?そこに秘められた可能性を引き出すことも、NTSの今後のセミナー事業展開における課題の一つであろう。

●パートナーの存在

9月号で、受講者200名を超えるスーパーセミナー成立の条件として、①革新性、②社会性、③速報性の三つを上げた。二軸シンポは①と③の条件を満たしたが、環境や情報等の地球規模の汎用性のあるテーマと異なり業界の特殊技術とあって②は必ずしも満たしていない。むしろ、「パートナーの存在」が「社会性」に匹敵する力を発揮した例である。次回は、「パートナーの連携」で誕生したスーパーセミナーの例をもう一つ紹介したい。

◉今月の人事

【退社】　配送センター

【昇格】　営業部営業3課課長

○年末年始の予定
12月20日(金)　忘年会（於:文京シビックセンター26F）
12月27日(金)　仕事納め
12月28日(土)～1月5日(日)　年末年始休暇
1月6日(月)～通常通り出勤

◉編集後記

「山下先生にインタビューをお願いしましょう」。編集会議の後の生ビールがおいしかった季節の事です。先生といろいろコンタクトをとりながら原稿が出来上がった時は、湯豆腐に熱燗のおいしい季節です。ようやく活字になりほっとしております。気がつけばもう師走、日々寒さが増してきます。皆様、風邪などひきませんように、Merry Chiristmas and Happy New Year（少し気が早いかな?）（あしだ）

◉編集部からのお願い

NTSニュースでは読者の皆様からのお便りや投稿をお待ちしております。また、開催予定の勉強会・イベント等、掲載をご希望される方は下記宛までご連絡ください。

NTSニュース
2002年12月号（通巻48号）
2002年12月25日発行